

## 方位

塊然たる其の處、物は之を得て居る。然り而して物は則ち神を得て活し、神は則ち物を得て立す。塊塊は位を得ざれば、則ち争でか能く物を容れん。活動は方を得ざれば、則ち焉んぞ能く其の神を行わん。故に位なる者は、立つ所の地なり。

物は處を得ざれば則ち居らず。位を得ざれば則ち立たず。植は地に著きて立ち、動は地に依りて立つ。依著は異なるも、而も之を立つるに地に由るに於ては則ち同じきなり。我と物と、已に位に由りて立つ。小に由りて大を察するに、天地は位を得ざれば則ち立たず。故に天は地を得て居る。地は中を得て立つ。故に外は容れざる所莫く、中は載せざる所莫し。

方なる者は、行く所の路なり。

車を置けば則ち箱、舟を泛かぶれば則ち水、故に上に在らざれば則ち下なり。左に在らざれば則ち右なり。居る者は位を以てせざる能わす。車を行れば軌に従う。舟を行れば風に従う。故に東に方せざれば則ち西なり。従いて行かざれば則ち衡う。行く者は方を以てせざる能わす。

位は基を爲して、物は以て此に立つ。方は路を爲して、氣は以て此に行く。故に宇宙なる者は、經緯の通塞なり。時の袞袞は、前後方を爲す。處の塊塊は、中外位を爲す。共に其の精なる者なり。神は轉持を見し、物は大地を露す。愈いよ其の方位に由る。天地なる者は物なり。物なる者は、虚實の體、正斜の形を以てして其の位に處す。其の方を行く。故に氣は動くと雖も、而も其の形は靜なり。時は通ずと雖も、而も其の位は立つ。位は形の靜を以て定る。形は位の立を以て成る。是に於て形は位に由りて理を布く。位は理に由りて中を定む。形位は相い成ると雖も、而も未だ虚實の體を得ざれば、物は何を以てか立たん。故に物は形を捨てて存せず。形は物を除きて成らず。然り而して物體は形に依らずして立つこと能わす。中は地を無内に占む。而して其の外は無垠なり。故に位立ちて

圓成る。守は中を兩頭に見して、而して其の縫は腹を爲す。故に矩は立ちて規を成す。此の故に、位は以て其の地を定め、形は以て其の體を成す。大物なる者は、動氣實體なり。實體は位を得ざれば、則ち居ること能わず。動氣は方を得ざれば、則ち行く可からずして、而して其の實體の立は、動氣の活を以てなり。是を以て持中に在りては、則ち嘖嘖に動き、轉中に在りては、則ち運轉に動く。故に位なる者は、體の立つ所なり。方なる者は、氣の向う所なり。體立ちて、神は其の中に活し、方定りて、氣は其の中に運す。蓋し體なる者は立し、神なる者は運す。體は乃ち形を外に成す。形を成す者は、能く内なる者を統ぶ。神は乃ち理を内に成す。内を成す者は、能く外なる者を貫く。故に發する者は氣を中に資り、收むる者は體を中に歸す。中外なる者は塊塊の位なり。時今の古今を行くと偶するなり。故に大小は體を有して、而して中外は體を没す。

持際は内を爲し、轉際は外を爲す。故に内は能く輻持し、外は能く輪轉す。中なる者は、無内の一點なり。外なる者は、無垠の塊塊なり。故に、地持なる者は小なり。小なる者は猶お容るるの内有り。容るるの内無き者にして、而して後、物として載せざる者莫し。物として載せざる者莫きが故に天地之に乗りて止る。天轉なる者は大なり。大なる者は猶お容るるの處有り。容るるの處無き者にして、而して後、物として容れざる者莫し。物として容れざる者莫きが故に天地之に居りて立つ。

天地は一圓體なり。氣は見れ體の露するよりして之を分てば、則ち地は中を地心に於て占め、天は中を轉心に於て占む。轉心は中を兩端に貫き、外なる可き者は縫を半の地に合す。地心は中を無内に占め、外なる者は無垠に位す。故に天地より之を言えば、山壑水燥を載するの地は、中の一點に乗り、日月景影を容るるの天は、外の無垠に居る。覆載より之を言えば、覆う所の日月景影は外を成し、載せる所の山壑水燥は内を成す。轉持は内外を爲し、轉守は中端を爲す。是を以て轉内は持を裹み、持外は轉を載す。斜より之を言えば、規中は能く守り、守外は能く轉ず。轉じて西を爲し、守つて北を爲す。西面は象に逆い、北外は守を環る。逆を東と爲し、環を南と爲す。西北は則ち

天の定方なり。上下は則ち地の靜位なり。東南は則ち轉の動方なり。内外は則ち持の動位なり。

氣は動靜を分ちて、動は轉じ靜は持す。外を轉處と爲し、内を持處と爲す。物は虚實を分つ。虚天實地は、下を

地體と爲し、上を天體と爲す。内下は則ち本なり。本なれば則ち中に歸して止まる。外上は則ち末なり。末なれば

則ち塊塊に之きて際涯無し。轉は運を分ちて、而して背馳を爲す。是に於てか、氣は東西南北を運す。混焉たる

大物は、中を以て其の依と爲す。上下内外の位の本づく所は、散結發收の由る所なり。滾焉たる轉氣は、極を

以て其の依と爲す。東西南北の方の成る所は、哮喘運轉の資る所なり。是に於て動は其の形を斜にして、而して

以て方を行く。靜は其の形を正にして、而して以て位に居る。車は輪を有すると雖も、而も輪は軸に依りて旋ら

ざること能わず。軸は旋に幹たりと雖も、而も軸は輪を用いて行かざること能わず。是を以て、西に向いて旋る

者は氣なり。正立して之を西に向わしむる者は、氣の幹なり。故に之を西軸と爲す。東に向いて旋る者は運なり。

斜側して之を東に向わしむる者は氣の幹なり。故に之を東軸と爲す。西軸は止りて其の位を守る。東軸は動きて

西軸を環る。故に東西なる者は、各輪旋すれば、則ち東西に指點の地無し。唯だ運輸は其の一規に通じて、

東せざる所莫し。轉輪は其の一規に通じて、西せざる所莫し。已に一規に通じて、西せざる所莫ければ、則ち其

の軸を爲して守る者は、兩端に通じて、而して北せざるを得ず。已に一規に通じて、東せざる所莫ければ、則ち

其の軸を爲して環る者は、其の兩端に通じて、而して南せざるを得ず。是の故に西北の方は豎なり。東南の方は

横なり。人は天地の半を以て、己の天地と爲す。其の中央に立ちて、衡從之を望む。是に於て守軸は兩端を爲

す。一を北と爲し、一を南と爲す。日去るの方を西行中線の向う所に取りて、以て西と爲す。日來るの方を西行

中線の背く所に取りて、以て東と爲す。是を以て靜を言いて動を遺す者は、未だ全を言うに足らず。然りと雖も

豎は兩向を爲して、而して人は半體の天地に在り。動なる者は定まらざれば、則ち定まる者に就きて方を取る。

定まる者に就きて方を取れば、則ち靜規矩に従う。東西南北を定めるは、亦た人の以て廢す可からざる者なり。

是を以て、全方なる者の、動靜の規矩に成るは天なり。偏方なる者の、十字の衝從に成るは人なり。

是を以て、升降は内に輻持し、運轉は外に輪轉す。運すれば則ち東し、轉ずれば則ち西す。西は則ち北を守る。東は則ち南を守る。故に、上下内外は、圓を以て其の中に成る。之を心と謂う。東西南北は、矩に由て其の中に成る。之を極と謂う。

一は必ず二を具す。是を以て靜圓は中外を得れば、則ち動直も亦た中外を得る。唯だ靜圓は中を得て以て無内を成し、外を得て以て無外を成す。動直は中を得て以て至狹を爲し、外を得て以て至廣を爲す。極の成る所なり。形なる者は圓にして直を成す。故に直圓は正形を爲す。理なる者は直にして圓を成す。故に規矩は斜形を爲す。規矩は理を經緯に分ち、直圓は形を内外に混ず。故に中外の成る所は、直圓各有り。之を平にすれば則ち中邊なり。之を長くすれば則ち中端なり。剖析の成る所なり。

物なる者は中を得て立ち、外を得て居る。是を以て機は止を中に得ざれば、則ち動く可からず。體は居を外に得ざれば、則ち實す可からず。天地は物を同じくせず。故に各其の位に立つ。象質は動を同じくせず。故に各其の方に行く。是を以て位は靜を以て立ち、方は動を以て見る。中は塊然の外を貫き、實する有りて氣を給す。外は眇焉の點を藏す。剛を以て物を保す。物は則ち之を給するの氣に資り、氣は則ち之を保するの氣を養す。資給養保は、此の間に居り、此の間に行く。故に物立は中外に由り、事行は向背を爲す。故に氣象なる者は、時の物、動きて其の居を常にせず。是を以て方を有す。氣質なる者は、處の物、止りて其の居を變えず。是を以て位を有す。故に行く者は氣なり。路は乃ち其の方、隱然たりと雖も、而も行く者は由らざるを得ず。居る者は物なり。宅は乃ち其の位、邃然たりと雖も、而も居る者は立たざるを得ず。此の故に機なる者は見氣、動止の鹿跡は都て動に入る。體なる者は露物、虚實の鹿體は同じく靜を爲す。是を以て、方位は處を物に於て定め、事を物に於て立つ。物は外を得て居り、中を得て立つ。氣は外を得て行き、中を得て止る。居る者は移り、行く者は復す。止りて定まる。立

ちて靜なり。夫れ處は物を容れ、物は處に居る。處は方位を容れ、物は方位を成して、而して物に大小有り。小處は小方位を成す。

素にして塊なり。文にして歧なり。物形の態然り。塞體なる者は、正圓正直なり。質は内に在り。氣は外に在り。下は内に合し、上は外に合す。通體なる者は、斜圓斜直なり。南北相背、東西相面す。日影の照蔽する所と、兩極の隱見する所は、必ず地の半を分つ。人は地の半に倚りて、以て輿地を平望す。日の出入に從いて、而して東西成り、極の隱見に由りて、而して南北分る。繩は上下を生じ、身は中邊を定む。規矩を衡從して、東西南北を定む。是れ人の地面の條理に從いて、而して方位を定むる者なり。人は又た、其の形に就きて方位を分つ。則ち前後左右、本末内外、以て紀す。此を以て彼に比す。天に合する所の上下内外は、我に於て本末内外を分つ。地に有する所の東西南北は、我に於て前後左右を爲す。

小物は小天地を成す。小大は同じく天地を有す。小大は各方位を具す。衡從横豎の條理は、上下内外の位、東西南北の方、之を四紀と謂う。上下は中外に合し、表裏は内外に合す。衡從は東西南北に合す。小物は本末内外の位、前後左右の方を資りて爲す。動植は又た其の中に反す。動本は上に在り。植本は下に在り。外は則ち表皮なり。内は則ち裏肉なり。前後左右を、動は身の面背手足に於て分ち、植は葉の面背中邊に於て見す。彼此は類を異にするを以て、而して其の氣を異にす。氣の異なるを以て、理形方位は同じからざるなり。故に日月星辰の其の行を經緯にし、雲雷水火の其の行を升降し、山壑の拗突し、水潮の流遡するは、理に隨いて變化す。天地は已に成器を得て、已に其の物を全す。成器は綱縊し、物は其の中に生ず。動植は形を塊歧に於て分ち、理を邪曲に於て爲す。

植は地に著きて豎立し、動は地を離れて横行す。動植の竝立は、塊歧に隨う。次第に其の文を開く。金石も亦た植なり。其の形を塊然として、而して艸木は則ち歧然として文を開く。介甲は亦た動なり。其の形を塊然として、而して禽獸は則ち歧然として文を開く。故に金石は僅に内外有り。未だ本末を得ず。艸木鳥獸にして、漸く本末

有り。而して艸木は、本を下にし末を上にする。鳥獸は、本を上にし末を下にする。植なる者は質物なり。養を下より資る。動なる者は天物なり。養を上より受く。動に首尾と曰い、植に根幹と曰う。首尾根幹、上下は同じからずと雖も、而も艸木は、精華を末に發し、鳥獸は、精華上に在れば、則ち終に一本末に歸す。

亦た 各 其の分に隨う。 各 其の方位を具す。

内外なる者は皮肉の分なり。本末なる者は首尾の位なり。人の前後左右有るは、猶お地の東西南北有るがごとし。而して頂の前後より、並び下りて臆に至るを中界と爲す。人の此の界を有するは、猶お天の中線を有るがごとし。人は地上に在りて、半天地を以て全天地と爲す。圓體を觀て、而して平體と爲す。其の見界に從いて、四方を定む。是れ以て能く見界の條理を正すと雖も、而も直圓の眞を遺す。身に中界有りて左右を分つは、地の中線有りて南北を分つに同じ。南北は則ち同様なり。彼れ寒ければ則ち此れ熱し。彼れ動けば則ち此れ止る。左右は則ち同形なり。左持すれば則ち右轉ず。右行けば則ち左 止る。南北は迭互の序有り。左右は迭互の用有り。天行は東より進み、東に向きて退かず。人行は前に向いて進み、後に向いて退く能わず。是を以て左右は南北に應じ、前後は東西に應じて、而して南北は則ち其の用を均しくす。左右は則ち利鈍有る者なり。蓋し我は半天地を以て、全天地と爲す。又た中線を分ちて 各 處を分つ。故に北人は身を西線の北に於て偏にして、偏北を其の正地と爲す。南人は身を西線の南に於て偏にして、偏南を其の正地と爲す。然れば則ち北人左右の利鈍は、南人の反を爲すか。或いは佗に反する者有りて我未だ識らざるか。姑く存して他日を待たん。

故に人は方を得て行かざれば則ち躓き、位を得て立たざれば則ち顛る。

天は則ち方位と立行と一なり。故に其の位有れば則ち立つ。其の方有れば則ち行く。人は則ち方位と立行と別なり。故に能者は其の位を安んじて、其の道に由る。不能者は則ち顛躓に至る。是を以て人位は則ち安危有り。人道は則ち淑慝有り。内に情欲意智を畜うるに由る。是を以て人生は天の自然に及ばず。人情は天則を得て之に法

らんと欲す。故に以て道を修するなり。若し能く之に法れば。則ち徳を以て其の位に居る。道を以て其の方による。